

論文の内容の要旨

論文題目 La nación escenificada. Estudio de las tragedias neoclásicas españolas en la época de la reforma teatral del conde de Aranda
(舞台の上のネイション アランダ伯爵の演劇改革期における
スペイン新古典悲劇の研究)

氏名 富田 広樹

本研究は、十八世紀スペインにおける演劇改革を積極的に推進したアランダ伯爵の時代の、特に悲劇に焦点を絞り、その芸術がネイションというアイデンティティの生成に果たした役割を明らかにすることを目的とする。

スペインにかんして、近代的な産物としてのネイションについては、十八世紀にその発生を求める意見がすでに歴史家たちによって示されている。本研究では、これまでの議論を整理しながら、近年の社会学分野における成果を踏まえ、ネイションをその度ごとに生成される言説として理解する。そこでは、ネイションが先にありきではなく、これに言及可能性、表象をあたえることによって、それを理解できる形で現出させる言説が存在すると考えられる。その言説を分析することで、どのようにネイションは生まれ、作られるかという問題への接近が可能となる。

スペインにおける新古典演劇は、時の政府の後押しをえて一七六〇年代末から、短い期間に花開く。この時代の演劇には、モデルを提示することによって観客の教育に資することが期待された。演劇に積極的に意味や役割を見出したその特殊な文脈の中で、その作品群に横断的にある表現様式がみられることに注目し、なかでも、悲劇がより身分の高い人々を観客として想定したことに鑑みて、新古典悲劇がネイションというアイデンティティの生成に担った役割を検討する。

論文は二部で構成される。第一部は研究の前提を据えることに、第二部は具体的な作品の分析に充てられる。

第一部第一章では、ネイションという問題を十八世紀について考えることの正当性と、ネイションについてこれまでなされてきた社会学分野の議論の整理、それを発展させる形での言説としてのネイションに注目する新しいアプローチと、これまでの演劇研究がネイションの問題をどのように扱ってきたかを示す。従来の研究にあって、ネイションをどう捉えるか、という議論の基盤が脆弱であったことを明らかにし、ネイションの言説をその要となるアイデンティティ、時間、空間の三つの観点から検討する意義を示す。

つづく第二章では、新古典演劇を分析の対象とすることの正当性をその社会歴史的背景に求めるとともに、同時代における演劇をめぐる一般的状況を概観する。また、新古典と呼ばれる様式の基礎ともいべき三一致の法則について、同時代の理論家イグナシオ・デ・ルサンの著作から検討する。さいごに、演劇という特殊な芸術様式に配慮して、ネイションの言説を発見していく方法論を提示する。

第二部を構成する五つの章は、個別の作品テキストの具体的な分析に充てられる。各章は、作品の概要、同時代並びに現代の批評の紹介、作品テキストに見られるアイデンティティ、空間、時間にまつわる言説の分析で構成される。

第三章で取り上げる『ムヌーサの死』において、アイデンティティは宗教や法、習慣とともにゴートの血統によって構成されている。われわれという集合は、その高貴な生まれにより首魁に選出されるペラーヨによって、民主的といえる方法で表象・代理される。ヒホンの空間は城壁、山々、そして海によってその他の世界から断絶した閉鎖空間である。すなわち外部には他者があり、内部には性格や習慣を共有するわれわれが存在する。しかし後に、これらの差異を作為的に捨象しながら、この一都市に全スペインが重ね合わせられる。過去はゴートの血脈や年代記の記録によって言及され、未来は来るべき将来の世代によって記憶にとどめられるであろうわれわれの勝利によって担保される。このようにして、われわれという集合は時間的に断絶のない一貫性を獲得する。

第四章で取り上げる『ソラーヤ』において、中心的な主題は家族の存続である。その血統は特質の遺伝継承とともに家族の同質性を担保する上で、重要性を持つ。ソラーヤの父アドリオが彼の国で最も尊敬される元老院議員であることから、その家族のおかれた状況はチェルケス全体に拡大される。表象・代理関係は、貢納として連れ去られる女たちとソラーヤの運命との類似性によって強化される。作品のなかで、出生の場所は人々の性質に重要性を持ち、同じ場所で生まれたものはアイデンティティにかかる同一の背景を有する。悲劇は一貫して王宮という閉鎖され、限定された空間の中で進展する。それはチェルケ

スの聖なる場所として、その国全体を表象する。スペインから遠く離れた場所に舞台をおいているせいで、その他の地理的言及は寡少である。それは歴史についても同様であるが、それでも作中では、若き日のアドリオの武勲が述べられるくんだりでその過去が想定され、またタタールのくびきを取り払う未来が謳われるとき、チェルケスの歴史的連続性が仮構されている。

第五章で取り上げる『ヌマンシアの滅亡』において、空間は、舞台の上でわれわれのものと他者のそれとに厳密に分割されている。ローマの包囲を受けるヌマンシアは半島内の他のすべての町から孤立し、その限定され、閉じられた空間の中で、住民は同じ宗教と慣習を共有している。同時に、孤立はヌマンシアとかつてのイベリア半島を結ぶ共通点でもあり、両者の表象・代理関係を可能にしている。神託はヌマンシアが自らのみの力を恃むのであれば不朽の栄光を手に入れると告げ、こうしてヌマンシアの民のアイデンティティは他者との混交から免れている。しかし、窮地にある祖国を救おうと試みるオルビアは、アフリカ生まれのローマ軍将校に身を委ねて、支援を引き出そうとする。その行動が、皮肉にもヌマンシアの滅亡を避けられぬものとする。オルビア、ヌマンシアがともに同胞の手にかかって死を迎えることは、両者の間に表象・代理関係が結ばれていることを示す。作中、遠い過去からつづく伝統や習慣への言及は数多くなされ、ローマやカルタゴといった他者による半島発見に先立つ時代が想起される。ヌマンシアの民は町を破壊し、みずから命を絶つが、その記憶が将来にわたって伝えられることによって滅亡の後の存続が想定される。

第六章で取り上げる『グスマン・エル・ブエノ』にあつて、われわれと他者を分断するものは話し方、文化、そして宗教である。作品の主題はレコンキスタにおいて重要性を持つタリファ城塞の防衛であり、その成否が半島全体の運命に結び付けられている。城塞の防衛という集合的な利害が、捕虜となった息子の救出というアロンソ個人のそれに優先する。これは、苦渋の決断を強いられるアロンソが、スペインのキリスト教徒全体を代理することの証左となる。個と集合は作中でしばしば対立を見せるが、個の論理が集合の論理の前に敗れ、吸収されることで、表象・代理関係が完全なものとなっているといえよう。作品はレコンキスタの苦難の歴史と、スペインの歴史とは切っても切り離せないグスマン一族の古い血統に言及することで、連綿とつらなる過去を提示するとともに、後世グスマンの家系より現れる新しい英雄によって、将来にわたりスペインが守護されることへの希望により時間の連続が示される。

第七章で取り上げる『ラケル』において、われわれと他者を隔てる軸は、ヨーロッパにおいて長く続く反ユダヤ主義というかたちをとった宗教の差異である。君主としての責任を放棄した王と臣民とのあいだの表象・代理関係は、冒頭より破綻している。その関係の回復こそが作品の中心的な主題となる。舞台

は王宮に設定され、物語の推移はすべてその閉鎖された空間の内部に限定される。王国もまた山々に囲繞されており、その民の同一の性質を形作っている。時間、空間への言及は極めて些少であるが、それは1766年に起こったエスキラーチェ暴動の記憶がまだ新鮮であったため、外国人に蹂躪されるスペインというイメージが、当時の観客にとって容易に想起できたためであろう。

以上の分析から二つの考察が導かれる。

第一に、新古典悲劇はアイデンティティ、時間、空間の三つの次元における個と集合との表象・代理関係にもとづいて構築される。個別の登場人物によって、集合全体が代理され、個別の空間がその集合の空間として提示される。これは何らかの境界によって限定され、閉鎖された空間として示される。しかし、この個別の空間は後に、舞台に示されているよりもさらに広い空間へと拡大を見せる。同時に、舞台上で推移する時間にはその集合の古い過去と、ときにアナクロニズムによって提示される未来が結びあわせられ、時間的連続性を与えられる。その延長に、舞台をみつめる観客の現在がある。

第二に、真実らしさを追求する古典的演劇規則は、ネイションの言説の表現に好適する。演劇の教育的機能が最大限に発揮されるには、観客がその内容に疑問を覚えることのない上演が必要となる。これにより作品世界内への観客の包摂が効果的になされるからである。ネイションの言説はアイデンティティ、時間、空間の三つの重要な要素を有するが、筋、時間、空間にかんする劇作上のルールによってそれらに合致することで、古典的演劇規則はそれらに疑問の余地なき自然らしさ、一貫性を与えることができる。

ここから次の結論を引き出す。新古典悲劇がネイションとしてのアイデンティティの成立に果たした役割とは、演劇芸術に内在する表象・代理関係を利用して、舞台の上に提示される集合のモデルへの同一化を通じ、観客がネイションとしての自己認識を可能とする前提条件を準備したことにある。新古典悲劇は、観客にネイションとは何かを説明するものではなく、自然な上演を通じて舞台の上で示される集合のモデルにその想定する観客を包摂し、その集合の一員であるという感覚を経験させる。演劇の持つ教育的機能と、ネイションの言説に好適した規則を有する演劇が、ネイションとしての自己認識を可能にする前提を整えたのである。